



＜写真＞昨年7月オランダで開催されたジュニア世界戦

2歳から始めた ローラースケート 夢は世界のトップ



体育会ローラースケート部
文学部ジャーナリズム学科1年
高萩^{たかはぎ}嬉^{うら}らさん

4月7・8日、ローラースケートの日本一を決める大会、全日本トラックレーススピード選手権。女子シニア1万mポイントレースで高萩嬉らさんは見事優勝に輝く。得意とする長距離種目で好成績。幸先の良い大学生活をスタートさせた。

最高速度は時速50kmを超すという迫力のレース。高速でコーナーに突っ込み、激しく競り合う。ぎりぎりの駆け引きの中で、転倒も珍しくない。そのため擦り傷は絶えないが、「負けず嫌いなので、レースでは怖さを忘れます」と高萩さん。爽やかな笑顔はレースでは勝負師の顔に変わる。

200mの短距離から1万mの長距離まで、さらに公道を走る42.195kmと様々な種目がある。高萩さんはそのすべてをこなす。高3のときには国内ジュニア大会の全種目で優勝し、堂々の総合優勝を果たした。海外ではジュニア世界戦（オランダ）で12位、アジア戦（韓国）で4位の成績を収めてきた。

初めてローラースケートを履いたのは2歳のとき。専大ローラースケート部OBの父・昌利さん（H5法卒）は、娘が歩けるようになるとすぐに特注のロー

ラースケートを履かせたという。やがて、父親が監督を務めるチーム“ブリザード”（東京・江戸川）で競技を始めたのは自然な流れだった。

小学校時代から頭角を現し、6年生で全国大会優勝。中学時代には部活のバスケットボールの方が楽しくなったこともあったそうだが、それでもトレーニングをやめはしなかった。継続は力——足を交互にクロスさせながら滑らかにコーナーを曲がる技術は、父に施された基礎練習のたまものだ。

国内ではトップの実力。しかし、海外に出れば韓国や台湾、コロンビアといった強豪国が立ち上がる。

昨年9月、韓国で開催されたアジア大会。周回ごとに一人ずつ脱落していく1万mエリミネーションレースでは、最後の1周を残し、トラック74周目で脱落。4位とはいえ、「最も悔しい思い出」と語る。

この7月、スペインで開催される世界大会に出場する。18歳以上のシニアのカテゴリーで初の世界戦となる。

「どこまで通用するのか、自分を試すのが楽しみ」と高萩さんは世界への挑戦に心躍らせる。